
中国の定期刊行物から中国音楽の最新事情を読む ——《人民音楽》を中心に

増山賢治（愛知県立芸術大学音楽学部教授）



《人民音楽》2007年1月号 表紙

1. はじめに

(1) 動機と目的

現在、日本では中国音楽に関する諸情報が比較的容易に入手可能となり、中国音楽に対する一般的認知度も以前とは比べものにならないほど高くなっている。勿論、それ自体は歓迎すべきことであろうが、一方では筆者が中国音楽研究に関わりを持つようになってから爾来、一研究者として関心を持ち続けている憂うべき事象、すなわち、中国音楽の理解を巡る各層多岐に渡る特異な現象が依然として存在していることも否定できない事実である。一般レベルでは京劇の《三国志》、《孫悟空》などといった限定された演目への執着、数有る胡琴のうち「二胡」という特定の楽器への偏愛、理論研究では、外国語教育における所謂「ネイティブ神話」に似た中国人による教学への盲信、さらに演奏・理論両面におけるディレッタントの横行（特に近年のネット上における中国音楽

関連のサイト、情報の氾濫)は中国音楽をより深く掘り下げ、真摯に伝えたい専門研究者の立場からすると目に余るものがあり、それぞれにもはや容認し難い段階に達したように思える。

そこで、そのような状況認識のもとに、本稿は中国音楽に関する定期刊行物という紙媒体による情報源への量的および質的な認識不足を、中国音楽に対する枚挙に暇がない誤謬や偏見の蔓延という悪しき現象を引き起こした重要要因として捉え、その改善策として、中国音楽関連の主要な定期刊行物を真摯に読み解くことの重要性、すなわち、演奏活動から研究動向に至るまで中国音楽の諸相を伝える紙媒体による諸情報を吟味、精査したからこそ感得しうる事象を中国音楽の最新事情として示すものである。

日本の民族音楽学界も、世界諸地域の音楽文化の研究に従事する専門家を数多く輩出しているが、筆者を含むほとんどの研究者は、自らの研究専門地域の音楽情報を入手し、その音楽事情を把握する際に、他地域(自らの研究専門地域以外の音楽)の研究者と相互に共通の普遍的な問題およびそれぞれに特有の状況が存在することをある程度は想像しつつも、自らの専門地域以外の研究状況については「不案内」というのが恐らく大凡の実感ではなからうか? 実際、それは止むを得ないことであり、むしろ問題なのは、中国以外の地域を専門とする音楽研究者が中国の音楽状況について知ろうとする際に、その主たる拠り所であるはずの中国語による情報源がどのような状況にあるのか、ほとんど無知のままに、様々なレベルの、正に玉石混淆の情報や研究成果を無批判に受け入れてしまうことにあると考えられる。一部の民族音楽学者の間で未だに見られる、英語による文献や口頭発表を介して得られる中国音楽研究の情報への盲信、中国語の先行研究文献をほとんど参照せずに平然と展開される中国での音楽調査などは、早急にその弊害を認識し、状況を改善すべきであることは、日本語で書かれた日本音楽の先行研究を顧みずに、日本音楽研究を英語の文献とフィールドワークだけで進めることの愚かさを思えば明白であろう。

(2) 対象と方法

そこで、本稿においては、中国における音楽関連の定期刊行物を概観し、その種類、特性を明らかにすることによって、それらをどのように参照すべきか

その指針を示すための前提としたい。まず、今回は中国を代表する音楽定期刊行物『人民音楽』（2007年1月号～12月号）を対象として、その掲載記事から注目される情報を選出し、中国の最新音楽事情を読みとり、そして、同誌は何を知るのに適切な刊行物か、その基本的特性を見極めたいと考える。すなわち、中国の音楽事情に関する諸情報が評論、紹介その他どのような形式や立場を通じて報道されているか、また伝統音楽、現代音楽などどのようなジャンルが扱われているかを整理して、情報分析とともに情報源としての中国の音楽定期刊行物そのものに関する考察も同時に行うことを目指すものである。

2. 中国の音楽関連定期刊行物の概要

『人民音楽』とは如何なる刊行物か？ それを知るには、まず、中国の音楽関連定期刊行物（紙媒体）の概要を把握しておく必要がある。それはまた、中国音楽の専門研究を進めるに当たって、先行研究を調べる際に基本的にどのような文献に当たるべきか、その中で『人民音楽』はどのような位置づけがなされるのか、そしてそれらをどのように活用すべきか、という問いに1つの回答例を示すことにもなるかと思う。

『中国発行定期刊行物目録 2008年版』（東方書店）によれば、定期刊行物の分野別による区分けは次のようになっている。1：新聞、2：画報、3：政治・法律、4：経済、5：哲学・社会科学、6：高等文化院校学報、7：歴史・地理、8：文化・生活、9：体育、10：教育・語学、11：老青少年・婦人、12：文学、13：戯劇・電影、14：音楽・舞踊、15：美術、16：自然科学・環境、17：生物・農林、18：医薬・衛生、19：中医・中薬、20：高等理工院校学報、21：工業・技術、22：英文版・日文版、23：香港・台湾・その他、それらに複印報刊資料、マイクロフィルム、逐次刊行物が添えられている。

中国の音楽に関する定期刊行物については、拙稿（参考文献を参照）における言及を待つまでもなく、すでに周知されていると見る向きもあるかも知れないが、近年の変動は急激かつ大きなものがあるので、それについて短いスパンで再三チェックを行うのも強ち無意味ではないだろう。それらを(1) 学術研究誌、(2) 学術研究誌ではないが、研究上有用と思われる記事が散見する一般誌、(3) 一般向け大衆誌の三類に大別してみるが、学術的に中国音楽研究（特に伝

統音楽)を進めようとする場合、単に音楽分野のみを参照するだけでは不十分であるので、関連分野をも含めて見ていこう。

(1) 学術研究誌

誌名	刊期	発行所
音楽研究	隔月刊	人民音楽出版社
中国音楽	季刊	中国音楽学院
中国音楽学	季刊	中国芸術研究院
中央音楽学院	季刊	中央音楽学院
星海音楽学院学報	季刊	星海音楽学院
音楽芸術	季刊	上海音楽学院
交響	季刊	西安音楽学院
黄鐘—武漢音楽学院学報	季刊	武漢音楽学院

これらはすべて音楽学領域における中国音楽の先行研究を当たる場合には、継続的に参照すべきものである。大半が主要音楽学院の紀要であるが、一般に定期購読が可能である。そして、複印報刊資料の『舞台芸術』（隔月刊 中国人民大学書報資料中心）も学術研究には欠かせない。関連分野のうち舞踊では、『北京舞蹈学院学報』（季刊 北京舞蹈学院）、哲学・社会科学からは『中国道教』（隔月刊 中国道教協会）、『上海道教』（季刊 上海道教協会）、『仏教文化』（隔月刊 中国仏教協会）、『五台山研究』（季刊 五台山研究会）ほかの宗教関係、歴史・地理からは『文物』（月刊 文物）、『考古』（月刊 中国社会科学院考古研究所）、『故宮博物院院刊』（隔月刊 故宮博物院）、『敦煌研究』（隔月刊 甘肅省敦煌研究院）等、また文学からは『文芸研究』（月刊 中国芸術研究院）等、逐次刊行物では『中華戯曲』（不定期 文化芸術出版社）等と正に枚挙に暇がないが、音楽関係の記事が掲載されることがあるので、必要に応じて目を通したいところである。

(2) 学術誌ではないが、時に研究上有用な情報が散見するので出来る限り継続的に参照すべきものとしては、以下のようなものを挙げることができよう。音

楽分野からは『楽器』(月刊 中国楽器協会)、『音楽創作』(隔月刊 中国音楽家協会)、『中国音楽教育』(月刊 人民音楽出版社)、『中小学音楽教育』(月刊 浙江省音楽家協会)、新聞からは『音楽週報』(週刊 北京市文化局)、香港台湾関係では、『表演芸術』(月刊 国立中正分化中心)が台湾の音楽状況を知るには重要なものである。戯劇分野からは音楽情報記事の豊富さという点で、『中国戯劇』(月刊 中国戯劇家協会)、『戯曲芸術』(隔月刊 中国戯曲学院)、『中国京劇』(月刊 文化部文化芸術人材中心)、そしてそれらに次いで『上海戯劇』(月刊 上海市文聯)、『戯劇芸術』(隔月刊 上海戯劇学院)、『当代戯劇』(隔月刊 陝西省戯劇家協会)、『四川戯劇』(隔月刊 四川省川劇芸術研究院)、『蒲劇芸術』(季刊 山西臨汾蒲劇院)、『黄梅戯芸術』(季刊 安慶市文化局)、『民族芸術研究』(隔月刊 雲南省民族芸術研究所)、寄席演芸の『曲芸』(月刊 中国曲芸家協会) などとなるうか。

(3) 一般大衆誌

このうち、音楽および舞踊分野では『音楽天地』(月刊 陝西省音楽家協会)、『音楽愛好者』(月刊 上海文芸出版社)、『音楽生活』(月刊 遼寧省文聯)、『声学技術』(隔月刊 中科院声学所)、『歌曲』(月刊 中国音楽家協会)、『歌劇』(月刊 上海歌劇院)、『当代歌壇』(半月刊 黒竜江对外文化交流協会)、『通俗歌曲(ロック版)』(月刊 通俗歌曲雜誌社)、『広播歌選』(月刊 中央人民広播電台)、『流行歌曲』(月刊 共青団河南省委)、『軽音楽(欧米版)』(月刊 吉林省文学芸術界聯)、『民族音楽』(隔月刊 雲南省群衆芸術館)、『詞刊』(月刊 中国音楽家協会)、『舞蹈』(月刊 中国舞蹈家協会)、『演芸圈』(週刊 北京市文化芸術音像)、ポピュラー音楽の『音像世界』(月刊 中国唱片)等は文字通り一般向きではあるが、それぞれのジャンル情報誌としてある程度有用である。

以上のように、専門研究を進める場合、情報量、情報の取捨選択、その際の複眼的視点を備えるべきであることが分かると思う。

上記の状況を踏まえて、『人民音楽』の性格を正しく把握し、有効活用し、如何に有用な情報を引き出すかを知る一助として、『当代中国音楽』の第31章「音楽出版事業と定期刊行物」の一文が参考になる。それによれば、『人民

音楽』とは「1950年9月北京にて創刊。初期の内容は評論と歌曲作品の二部構成で、1953年に理論評論を主とし、理論研究、作品・公演の評論、大衆音楽の業務、民族民間音楽、外国音楽の紹介、音楽知識と音楽活動の報道等を内容とする総合的な刊行物となった。(以下略)」となっている。そこから、現代中国における最も歴史の古い、音楽総合誌だと推測し得るが、現在(『人民音楽2007年1月号』)の投稿規定を見てみると、さらにそれが明確になるだろう。

「《人民音楽》とは中国音楽家協会が主催する評論、理論の刊行物である。《人民音楽》はマルクス主義、毛沢東思想、鄧小平理論という3つの重要な思想と科学的な発展の見方を堅持、4つの基本原則と改革開放の方針を堅持し、党の古為今用、洋为中用、百家争鳴、百花齐放の方針を貫徹するものである。内容は中国および外国音楽理論研究、創作、演奏、教育、社会音楽生活など音楽の各ジャンルを含み、55年来多くの重要な音楽文献を發表し、国内外の楽壇に広汎な影響を及ぼしてきた。2006年改版以降の《人民音楽》はさらに豊富な詳細且つ正確な内容と全く新しい装幀を読者に供するものである。」(訳文は筆者による)

3. 2007年『人民音楽』の掲載情報から中国音楽の最新事情を読む

次に、実際に『人民音楽』の内容構成、各セクションを概観し、新たな規準を設けて情報を分類してみる。『人民音楽』(2007年12月)の「2007年総目録」には下記のようなセクション別にそれぞれの記事タイトルが記載されている。括弧内は筆者による試訳。

専稿(主要記事、論説)、創作研究・楽海擷英(才能抜粹)、当代音楽家、民族音楽、楽海鈞沈(ピックアップ)、中国音楽“金鐘賞”、表演芸術(演奏芸術)、音教園地(音楽教育の活動舞台)、音楽学探索、書林漫步、社会音楽生活、楽事短評、環球採風(世界から)、楽海短波

このうち、中国音楽“金鐘賞”(党中央宣伝部によって承認されている最高峰の音楽賞)の報道は5月号、12月号にのみ掲載されている。毎号付されている文章英文摘要と、総目録では省かれているがほぼ毎号登場する演出資訊(上

演インフォメーション)を加えると、通常のセクションは【専稿】、【創作研究・楽海擷英】、【当代音楽家】、【民族音楽】、【楽海鈎沈】、【表演芸術】、【音教園地】、【音楽学探索】、【書林漫步】、【社会音楽生活】、【楽事短評】、【環球採風】、【楽海短波】、【演出資訊】、【文章英文摘要】ということになる(それ以外に、【北京現代音楽節】が8月号のみに登場して、臨時に組み込まれているが)。それぞれのセクションは中国音楽の各ジャンルを扱うものであるが、毎号それらがすべて登場するのではなく、時に休載されることもあり、順序も位置も不変なのは文章英文摘要のみである。1-12号の各セクションを掲載順に次に記す。

1月号

(1) 当代音楽家、(2) 創作研究・楽海擷英、(3) 専稿、(4) 音教園地、(5) 音楽学探索、(6) 楽海鈎沈、(7) 民族音楽、(8) 環球採風、(9) 社会音楽生活、(10) 楽事短評、(11) 書林漫步、(12) 楽海短波、(13) 演出資訊、(14) 文章英文摘要
休載→表演芸術

2月号

(1) 当代音楽家、(2) 楽海鈎沈、(3) 専稿、(4) 創作研究・楽海擷英、(5) 音楽学探索、(6) 民族音楽、(7) 表演芸術、(8) 環球採風、(9) 社会音楽生活、(10) 楽事短評、(11) 楽海短波、(12) 演出資訊、(13) 文章英文摘要
休載→音教園地、書林漫步

3月号

(1) 専稿、(2) 当代音楽家、(3) 創作研究・楽海擷英、(4) 楽海鈎沈、(5) 表演芸術、(6) 環球採風、(7) 民族音楽、(8) 音教園地、(9) 書林漫步、(10) 楽海短波、(11) 文章英文摘要
休載→音楽学探索、社会音楽生活、楽事短評、演出資訊

4月号

(1) 当代音楽家、(2) 創作研究・楽海擷英、(3) 楽海鈎沈、(4) 表演芸術、(5) 民族音楽、(6) 音教園地、(7) 音楽学探索、(8) 環球採風、(9) 社会音楽生活、(10) 書林漫步、(11) 楽事短評、(12) 楽海短波、(13) 演出資訊、(14) 文章英文摘要
休載→専稿

5月号

(1) 当代音楽家、(2) 中国音楽“金鐘賞”、(3) 民族音楽、専稿、(4) 創作研究・楽海擷英、(5) 楽海鈎沈、(6) 音教園地、(7) 表演芸術、(8) 環球採風、(9) 音楽学探索、(10) 書林漫步、(11) 社会音楽生活、(12) 演出資訊、(13) 楽海短波、(14) 文章英文摘要

休載→楽事短評

6月号

(1) 創作研究・楽海擷英、(2) 表演芸術、(3) 楽海鈎沈、(4) 専稿、(5) 当代音楽家、(6) 民族音楽、(7) 音教園地、(8) 音楽学探索、(9) 環球採風、(10) 書林漫步、(11) 楽海短波、(12) 演出資訊、(13) 文章英文摘要

休載→社会音楽生活、楽事短評

7月号

(1) 当代音楽家、(2) 創作研究・楽海擷英、(3) 楽海鈎沈、(4) 表演芸術、(5) 民族音楽、(6) 専稿、(7) 音教園地、(8) 音楽学探索、(9) 社会音楽生活、(10) 楽事短評、(11) 環球採風、(12) 書林漫步、(13) 楽海短波、(14) 演出資訊、(15) 文章英文摘要

休載なし

8月号

(1) 当代音楽家、(2) 専稿、(3) 創作研究（・楽海擷英）、(4) 北京現代音楽節、(5) 民族音楽、(6) 楽海鈎沈、(8) 音教園地、(7) 音楽学探索、(11) 書林漫步、(9) 社会音楽生活、(10) 環球採風、(12) 楽海短波、(13) 演出資訊、(14) 文章英文摘要

休載→表演芸術、楽事短評 (4) が臨時に加入

9月号

(1) 専稿、(3) 創作研究・楽海擷英、(2) 当代音楽家、(7) 民族音楽、(4) 楽海鈎沈、(5) 表演芸術、(6) 音教園地、(8) 音楽学探索、(12) 書林漫步、(10) 社会音楽生活、(9) 楽事短評、(11) 環球採風、(13) 楽海短波、(14) 演出資訊、(15) 文章英文摘要

休載なし

10月号

(1) 専稿、(2) 当代音楽家、(3) 創作研究・楽海擷英、(4) 表演芸術、(5) 民族音楽、(6) 楽海鈎沈、(7) 音教園地、(8) 音楽学探索、(9) 環球採風、(10) 社会音楽生活、

(11) 書林漫歩 (12) 楽海短波、(13) 演出資訊、(14) 文章英文摘要
休載→楽事短評

11月号

(1) 当代音楽家、(2) 専稿、(3) 創作研究・楽海擷英、(4) 表演芸術、(5) 民族音楽、
(6) 楽海鈎沈、(7) 音教園地、(8) 音楽学探索、(9) 環球採風、(10) 社会音楽生活、
(11) 書林漫歩、(12) 楽海短波、(13) 演出資訊、(14) 文章英文摘要
休載→楽事短評

12月号

(1) 創作研究・楽海擷英、(2) 中国音楽“金鐘賞”、(3) 専稿、(4) 表演芸術、(5)
音楽学探索、(6) 民族音楽、(7) 楽海鈎沈、(8) 環球採風、(9) 音教園地、(10)
書林漫歩、(11) 楽海短波、(12) 文章英文摘要
休載→当代音楽家、社会音楽生活、楽事短評、演出資訊

【専稿】はもとより、創作、演奏の扱いの頻度の高さは当然予想されるところだが、民族音楽、音楽学と音楽教育学がしっかりと組み込まれていることが目を引く。中国における音楽というもののとらえ方、そのものを反映しているとすれば、音楽学院のコース開設のあり方を連想するのは恐らく筆者だけではない。

次に、各セクションの概要を総目録の順序に沿って概観する。【専稿】はいわゆる学術論文というより、政治色、民族色が強く反映されている論説が多いという感触を受ける。内容的には各音楽ジャンルの演奏、創作、理論など多種多様であるが、大型イベントに関するものが多いようである。中でも目を引くのは音楽家協会主席をはじめとするVIPの発言を収録した記事で、政治的意図を強調する立場から選択され報道されるのだろうが、そのイベントの存在を知り、内容の詳細を調べるキッカケとすることはできる。【創作研究・楽海擷英】は文字通り、新作を中心とする音楽作品の紹介や分析が中心となっている。【当代音楽家】は演奏家、作曲家、理論研究者と広く現代に活躍している音楽家を紹介している。作曲家は作品リストが記される事が多く、便利。【民族音楽】とは中国の民族的スタイルの音楽の総称であり、古典的なものから比較的新しいものまでを含んでいる。【楽海鈎沈】は主として中国の過去の音楽家の

功績を取り上げており、歴史研究のヒントとなる情報もあるので、一定の利用価値がある。【表演芸術】は演奏批評、演奏研究。【音教園地】文字通り音楽教育関連。【音楽学探索】はその名の通り。【書林漫步】は書籍紹介・批評。【社会音楽生活】はネット音楽やカバーヴァージョンの記事が多いので、流行音楽を扱うセクションと思われる。【楽事短評】は各ジャンルの活動を報道するのが主のようで、名称のとおり、主張、意見も若干織り込まれている。【環球採風】とは海外における中国人音楽家の話題が中心で性格的には上記と大同小異。【楽海短波】は内外のニュースを簡潔に報道しているもの。【演出資訊】は演奏会のスケジュール。【文章英文摘要】は【専稿】の記事の要旨の英文訳である。ちなみに、『人民音楽』には広告は掲載されていない。

このように『人民音楽』は各セクションに細分されているが、そのままの状態では散在する情報から中国の音楽事情の某かの傾向を指摘するには難しいので、本稿ではその分けを参考に、新たな枠組み設けて情報を分類してみよう。実際、1つの事象が複数のセクションで取り上げられていることが多いので、大まかに下記のように再分類して検討する。再分類に際しては、『当代音楽』叢書編輯部『当代音楽』（当代中国出版社、1997）で採用されている「新中国の音楽発展の歴史的過程」「音楽創作」「音楽演奏芸術」「音楽理論研究」「音楽教育」という分けを参考に次のように設定した。

(1) 演奏領域の諸活動・動向、(2) 創作領域の諸活動・動向、(3) 理論研究・教育（学術関連）の諸活動・動向と論説、出版領域の動向、(4) 表彰・コンクール、音楽家紹介、(5) その他

(1) 演奏領域の諸活動・動向

まず、【演出資訊】を一瞥すると、北京、上海といった大都市の主要ホールのイベントの開催状況の一部を知ることができる。しかし、コンサート名、日時、場所、曲目、演奏者はあるが、チケット代が書かれていない場合があり、簡潔というより粗野に近いが、演奏者には欧米のほかに日本の演奏家の名も看取されて、中国の音楽市場のグローバル化の状況を読みとることができる。ただ、それ以外の地方の演奏活動については、『音楽週報』など別の情報誌を参照せ

ねばならない。3月、9月、12月を除く1月号～11月号までの演奏会スケジュールでは、北京と上海のホールに関しては毎号報道され、それぞれに次のようなホールが含まれている。北京＝保利劇院、北京音楽庁、中山音楽堂、人民大会堂、北展劇場、世紀劇院、北京大學記念講堂、上海＝上海東方芸術中心東方音楽庁、上海音楽庁、上海大舞台、上海商城劇院、上海大劇院一大劇場、金茂音楽庁、賀緑汀音楽庁、蘭心大戲院。広州は6月号のみで星海音楽庁が取り上げられ、香港とマカオについては2月のみにそれぞれ荃湾大会堂演奏庁、マカオ文化中心小劇場が登場している。9月号では第十回北京国際音楽祭のスケジュールのみが報道され、3月号と12月号は何故か記載はない。

次に、各セクションから音楽ジャンル別に記事を抽出し、それぞれの動向を見ていくが、例として言及する記事は、原則として著者名、記事名に続いてカッコ内に掲載号および掲載開始ページとコーナー名を付すこととする。例えば、呉葉「2006 北京・国際古琴音楽文化ウィーク総述」(2/56、【民族音楽】)であれば、著者は呉葉、「」内が記事名、2月号の56頁、【民族音楽】のコーナーに掲載されたことを意味する。伝統音楽については、呉葉「2006 北京・国際古琴音楽文化ウィーク総述」(2/56、【民族音楽】)、于亮「理念の刷新、実践の探索－2007 年上海音楽学院古琴会議および音楽会シリーズ活動報告」(11/38、【民族音楽】)のように、古琴関連のイベントが報道されているが、いずれもコンサートとフォーラムと抱き合わせになっている。それは、北京現代音楽祭における伝統音楽公演でも同様で、何とか保存に積極的に取り組んでいることを強調しているが、これまで伝統音楽を放置、蔑ろにしてきたツケが露呈していることが読み取れる。それ以外では、中国音楽学院“ウィグル族民間音楽教学ウィーク”活動(12/88、【楽海短波】)ほか若干見られる程度で、全体に少なく、やはり、伝統音楽に演奏状況については、学術誌および戯劇関係の専門誌を参照する必要がある。

新しい形式の中国器楽である民楽では、何山、張少飛「2006 中国江蘇二胡の故郷の民族音楽祭」(2/27、【専稿】)のように、その活動状況も大型イベントを中心にそれなりに取り上げているが、特に海外公演の成功をアピールした姿勢が伺える。それは民楽が実は不人気であるという実情が背景にあり、報道に特に力を入れているものと思われる。その点に気づかないと、こうした記

事を鵜呑みに、賛美してしまう危険性がある。それは、香港中楽団（香港を代表する中国楽器によるオーケストラ）の30周年イベントについても同様で、彭麗「中国の楽の音 香港にこだまする－香港中楽団30周年慶賀活動述評」（12/6、【専稿】）、阮仕春「胡琴伝統芸術と環境保護－香港中楽団の“楽器改革”の創意と実践」（12/10、【専稿】）や、劉靖之「2007 香港芸術祭巡礼」（4/40、【表演芸術】）、楊燕迪「古典と伝統の瞬間的生命－第20回マカオ国際音楽祭を見て」（2/86、【表演芸術】）ですら、香港の大型イベント活動について一定の配慮を示しているように見えるが、香港を完全に政治的に組み込んだことを内外にアピールする意図があることに他ならない。文芸は中国の国内外における重要な国家戦略の一環であることを前提として知っておくべきである。

以上、『人民音楽』の報道から各ジャンルとも個人リサیتالより、音楽祭のような団体主催によるより大がかりなイベントが多く報道されているのを見ると、政治性を重視する方針であることが推測される。

(2) 創作領域の諸活動・動向

現代音楽の作品分析、コンサートレビューなどと多様であるが、現代音楽関係では、やはり【創作研究・楽海擷英】からの記事が多い。汪勝付「新世紀の音楽語法を求めて－2006 北京国際電子音楽祭総述」（3/72）、王安潮「新しい音響の最前線に向かって－2006 上海国際電子音楽ウィーク総述」（3/76）、徐璽宝「伝統と現代のシンフォニー－張小夫電子音楽新作品《隈取り》評論と分析」（12/26）、王安国「我が国の現代音楽作品の社会的価値および若手作曲家の育成」（1/18）、劉曉倩「中国現代作曲家室内楽作品音楽会感想」（1/44）、王安潮「クロスカルチャーの視野を以て展開される総合美－朱世瑞室内楽作品音楽会述評」（11/32）、程興旺「顕在化する価値：学術的音楽と音楽的学術－“朱世瑞室内楽作品音楽会創作フォーラム”総述」（11/35）、張純、郭紅喜「葉小綱教授師弟作品音楽会“雲の上の日々”を評す」（4/20）、張建国「全く新しいオペラの創作概念：1 + 1 = 1－《秦始皇》から見た譚盾のオペラ創作概念」（12/23）等の他、【専稿】からも陳荃有「音楽文化の展開モデルの新しい試み－《中国当代作曲家楽曲バンク》シリーズ活動評述」（7/57）がある。そして、いわゆる前衛とは一定の距離を置くスタイルの創作では、バレエ劇『白

鹿原』に関する記事や、相変わらず「民族化」を強調している事例が見られる。唐平「中国ピアノ音楽作品特有の音韻」(5/18)、婁娜「中国ピアノ組曲創作の発展の道を論じる」(5/22)、劉娜「中国ピアノ芸術民族化小論」(5/25)などで、その象徴的活動が陳丹布「第一回“帕拉天奴”杯中国音楽創作(ピアノ作品)コンクールポルタージュ」(9/34)であるとみるべきだろう。

民楽方面では劉長遠の琵琶コンチェルトの批評、安魯新「精練なタッチ、エキサイティングな章節—劉長遠琵琶コンチェルト《戲弾》を評す」(4/12)など、その他、中国芸術歌曲(日本歌曲に相当するもの)に関するものも散見する(傅庚辰「芸術歌曲はどこへ向かう—中国芸術歌曲フォーラムにおける発言」(7/24)ほか三編)し、この領域の動向を知るための情報も相当に有用であるが、創作路線に関する当局関与の姿勢が見え隠れしている。

(3) 理論研究・教育領域の動向

ここには学術・教育関連の諸活動と論説、出版などが含まれ、博士課程や音楽分野別研究会の情報、学術論文に準ずる論説が掲載されることがあり、その中には有益な情報が含まれているものもある。音大が主催、請負開催となった学会、研究会といった学術関係のイベントは多岐に渡るセクションから拾える。まず、一定のトピックを扱った活動として、王洪軍「律器音楽を整え、再び豊かな実を結ぶ—東アジア楽律学第二次学術フォーラムが武漢音楽学院で開催」(8/62、【音楽学探索】)、張寧「朱載堉生誕 470 周年記念学術フォーラム総述」(1/64、【楽海鈞沈】)、王先艷「“未来社会における伝統音楽”学術フォーラム」総述(8/48、【民族音楽】)、尚飛林、于慶新「陝北民歌—機会と挑戦の併存—陝北民歌フォーラム及び陝西省音楽家協会 2007 年工作会議」(7/46、【民族音楽】)、学会では、肆口「エリートが杭州に集い、秋に実を結ぶ—中国伝統音楽学会第 14 回全国大会および第 4 次会員大会総述」(2/70、【民族音楽】)のほか、音楽評論の分野でも周建明「音声の道を評し、楽人の徳を論ず—中国音楽評論学会第二回全国大会および第一回“音楽評論学会賞”」(8/20、【専稿】)や全国第一回“音楽評論学会賞”表彰結果発表(7/92、【楽海短波】)があるところをみると、近年重視されている分野であることが推測される。その他、高彩榮「100 年の歴史を振り返り、手を携えて共に明日を作る—第 4 回全国

音楽理論刊行物業務フォーラム総述」(2/32、【専稿】)、それから【楽海短波】における第一回“全国音楽伝播に関する論文募集活動”の告知(7/92)も注目される。

雑誌論文の類では【専稿】から、朱新華「江蘇民謡《ジャスミンの花》は結局誰のものなのか」(6/50)、《中国民歌集成・江蘇卷》編委「現在の社会における江蘇民謡《ジャスミンの花》に関する様々な不正確な言説を正す」(6/59)、【民族音楽】からは、伝統音楽保存への認識、取り組み、観光文化の視点からなど多様な内容の論考が目をつけた。李玲「ルーツ関連から見た原型民謡とその保護」(2/60)、徐楽娜「広西文化ツアーの流行による同地の民謡への影響」(2/63)、呉静「本来の環境から離れた原型民謡は真の原型民謡か？」(3/62)、史維生「原型民謡の現代文化における保護と伝承」(3/65)、呉小燕、李徳隆「中国伝統音楽の興隆と衰退」(9/51)、庄曉慶「腕前を保つとは一民間楽器制作工房訪問レポート」(1/66)、孔義龍「河南葉県旧県4号墓編鐘考察ノート」(2/68)、李維路「五弦琵琶の歴史淵源と芸術表現力について」(2/73)、劉曉玲「絶滅もやむなし―諸城派古琴の勃興と式微」(2/76)、張翠蘭「現存する清代の洋琴について」(12/50)、伍国棟「蘇南“糸竹繁興”の楽社の背景」(7/48)、馮光「広東漢楽はどこへ向かう」(6/64)等が中国伝統音楽(研究)の最新事情を反映している。少数民族関係では、唐志明「湘西苗族儺戲發展簡述」(11/40)、張拝儂監訳「ムカーム音楽の核となる旋律について」(12/47)、【楽海鈞沈】からは、譚龍建「三弦器楽音楽の発展の歴史に対する白鳳岩の貢献」(6/42)、郭琳「曹正先生 of 古箏芸術生涯と業績」(4/28)ほか1編、近代音楽では、陳静野「李叔同と沈心工―李叔同の《送別》研究における若干の問題」(5/30)、喻宜萱口述、金毓鎮整理「97歳喻宜萱馬思聰を思う」(5/36)ほか馬思聰関連の3記事や、陳瑞泉「輝きと寂寥が交錯する命の楽章―中国近代管弦楽事業の対する梅百器の貢献」(10/41)なども研究情報として参考にする価値のあるものである。

そして、【専稿】からは金兆鈞「インターネット歌曲に関する断想」(12/29)、王素芳「強烈な社会的責任感を以て時代を反映した良いインターネット歌曲を作ろう」(12/30)といった新しい音楽事象に関する報告も見られる。中でも興味深いのは、周武彦「“参考文献”は“引用注釈”の代わりにはならない」

(6/84、【音楽学探索】)や居其宏「音楽批評と学術の剽窃を批判する」(11/74、【音楽学探索】)といった学風に対する批判である。その他、李紅梅「パンソリの伝承の現状から京劇の保護と発展を語る」(8/82、【環球採風】)のような新しい観点を見せたものもある。

【楽事短評】は全体に量は少ないが、戴嘉枋「“模範劇”の“復活”から見た市場原理下の主流音楽の困惑」(1/84)、張子銳「古代伝統楽理は現代でも生きている」(7/79)が目をつけた。【書林漫歩】からは、限りがあるが、当然音楽書の出版状況の一端を知ることができる。学術的なものは音楽学院の紀要類を見れば良い訳だが、楊和平、邢淑敏「中国伝統楽理の新傑作—杜亜雄の『中国伝統楽理教程』」(1/90)、汪毓和「地域的、時代的、テーマ別による音楽史として得難い著作—呉贛伯『二十世紀香港中樂史稿』」(6/90)、徐天祥「心で結ばれる中国伝統音楽『ルーツを求めて—中国伝統音楽学文集』の読書ノート」、劉航「『中国大衆音楽—大衆音楽文化の社会歴史のつながりと伝播』」など、やはり西洋関係よりも中国音楽に関するものに興味そそられるものが含まれている。

音楽教育関係は、当然、【音楽園地】からが多い。全体に賑やかだが、楊曉「音楽院校“学生募集ブーム”をクールに考える」(3/84)に代表されるように、とりわけ、高等教育に関して注目すべき動向が見える。喬邦利「音楽学エリート養成者たちはかく語りき—第1回“全国音楽学博士指導教員論壇”」(9/44)、これについては【楽海短波】でも中国音楽学院“第二回中国音楽博士論壇”開催(1/94)、中国音楽学博士指導教員論壇開設(3/94)を報道している。また、学科増設、カリキュラム改革も活発化していることが、王建元「大学レベルにおける流行音楽教育も教科カリキュラムの確立を—2006年第1回中国音楽芸術大学系流行音楽論壇の中心テーマを総括する」(1/58)、許冰、馬達「我が国の高等音楽教育教学改革の再認識と展望—2006年“全国高等音楽教育課程の発展と教学研究学術フォーラム”総述」(3/79)、李小諾、陳婷婷「学科建設を強め、内なる発展に焦点を—上海音楽学院学科建設の概況」(4/68)、黃志鵬「国内音楽科学技術と関連学科の発展建設について」(5/52)などから伺える。それから、陳立芳「教学の質を高め、研究の道筋を切り開け—全国大学レベル教育機関作曲理論とカリキュラム改革フォーラムの解説と評論」(1/51)

や、蔡夢「“第2回全国音楽学院作曲科主任連絡会議”」（1/30、【創作研究・楽海撷英】）などは日本でも参考にしてはどうかと思う。

(4) 表彰・コンクール、音楽家の紹介

【中国音楽“金鐘賞”】は当該の2編の記事以外にも、【専稿】から張萌「金鐘が広州に鳴り響き、合唱は湘江を揺るがす—第6回中国音楽“金鐘獎”第1回合唱コンクールノート」（9/20）、傅庚辰「中国音楽の新しい高まり—第6回中国音楽“金鐘賞”合唱部門第1回コンクール」（10/13）等大きく報道されており、それ以外では【表演芸術】から周銘孫「さらなる新基軸を目指し飛躍する—“2006中国深_国際ピアノコンチェルトコンクール”解説と批評」（2/79）、卞祖善「指揮芸術のエリートを大いに育成する—中国・2006深_指揮コンクール解説と批評」等各種のコンクールが広範囲に取り上げられている。同類のニュースは【楽海短波】にも含まれているが、目新しいものは少ないので省略する。

それから、有用と思われるのが【当代音楽家】である。このセクションは作曲家、演奏家、理論研究者と幅広い分野を網羅しており、これまでの活動の足跡や近況を知ることができるのは有り難い。ベテランから若手までタイトルの示すように現在活躍中の音楽家を主体とし、作曲家、演奏家、音楽学者、音楽翻訳家に至るまでその半生、芸歴などの祝賀記念行事に絡めて取り上げられており、その足跡と近況を知ることができる。中国語の近代現代音楽史を翻訳させてまとめただけのアジア現代音楽に関する日本語の著作などより参考になることは明らかである。同方面の情報を正しく知りたいならば、李吉提「周龍—アメリカで道を切りひらく作曲家」（5/4）、金湘「《啓発》からの啓発—周龍交響曲作品音楽会の解説と批評」（5/4）、卜大焯「“龍声華韻”—周龍その人と音楽」（5/11）、蔡夢「楽壇への尽力、大いなる成果—作曲家楊青教授のこと」（9/4）などは是非参照されたい。また、過去の音楽家については【楽海】で扱われているおり、こちらも同様に有用である。

(5) その他にも黒竜江省に音楽博物館開館について記事など、情報として有益なものも含まれている。例えば、一見、学術会議のように見えるが、路線に関

する総括的テーマとするフォーラムの報道が掲載されるのも『人民音楽』の特徴の1つかと思われる。傅庚辰「中国音楽の新たな高まり—中国音楽家協会第六回理事会第三次会議における講話」（10/13、【専稿】）の類がその典型であるが、そして、徐天祥「新世紀中華楽派：理念と方向—第一回“新世紀中華楽派フォーラム”傍聴記」（1/32）、趙宋光、金湘、喬建中、謝嘉幸「“新世紀中華楽派”の建設を」（1/36）ほか計四編は、演奏・創作・研究各分野に「中華楽派」と称すべきスタイルを確立すべきと主張したもので、中国の独自性を何かと強調したがる中国の近年の傾向が顕著に表れており、このように音楽界方向性を左右するような記事が掲載されるという意味では、見落とせないものである。

4. 結論

以上の考察の結果、2007年『人民音楽』掲載の諸情報から見た中国の最新音楽事情、そして、情報源としての『人民音楽』の有用性と限界が、ある程度明らかにされたと思う。すなわち、

(1) 『人民音楽』で取り上げる演奏活動は大型イベントが中心であり、個人の演奏会の状況について知ることは難しい。個別の情報は他の情報源を利用する必要がある。むしろ、音楽界を含めた中国の文芸路線のような大きなコンセプトを知るのに有用な情報が掲載されている。

(2) 伝統音楽を含め音楽の多様なジャンルおよび演奏、創作、研究・教育各部門が一応、フラットに扱われている。表彰、コンクール部門の増設、教育機関における流行音楽など新学科の増設などにもそれが現れている。

(3) 表彰、コンクール、学術活動が勢い付く中、演奏、創作、研究、出版など各分野で音楽大学が主導的役割を果たしており、音大の教員は専門に忙殺されるという羨ましい環境が伺えるが、良くも悪くも、当局の関与が感じられる。

(4) 分野別では、音楽学、音楽教育がかなり活発な展開を見せていることが分かる。特に中国（伝統）音楽の研究には勢いが感じられ、質的向上も見える。中国における音楽学、とりわけ博士課程の整備は中国音楽研究各方面への影響は必至であり、レベルアップが期待される。これにより、中国国内外の大学や音大の修士課程、博士課程における中国音楽研究の実情が問題視され、是正さ

れていくことも考えられよう。日本では音楽学の基礎さえも学んだことのない中国人演奏家を修士課程の民族音楽学専攻の院生に衣替えさせている「病巣」のような高等教育機関が未だに存在し、本稿の冒頭で挙げた中国音楽の基本的な定期刊行物を「中国ではなかなか手に入らない」などと称する学問的認識レベルの中国人留学生を博士課程に在籍させるなど俄には信じがたい現象が起きているが、こうした悪しき状況への何等かの好影響が期待されるどころである。実際は様々な問題を内包しつつも表面上は中国の音楽界がいかに活発化しており、日本などはすでに眼中にないことは《人民音楽》という一刊行物からだけでも十分に感じられる。それに対して、ほとんど何もせずに、変革を頑なに拒否し続けて、博士課程の設置すら十分に理解、円滑な協力を得られないような日本の芸術大学、音楽大学は、高等教育機関としての自覚を放棄しているとしたか言いようがないのではなからうか。

いずれにしても、《人民音楽》一誌を以てしても、中国のプロパガンダ、アピールの巧妙さは目を見張るものがあるが、この背後には文芸はプロパガンダの重要な道具として捉えている国ならではの政策があることを銘記せねばならない。掲載された情報から当局が何を強調したいのか、読みとるのがプロの研究員の役割であろう。例えば、コンサートではフォーラムを伴うことが多いが、この現象は「日本では余り見られなく有意義である」とか、甚だしきは中国のピアニスト、ヴァイオリニストによる海外コンクール受賞が増えたことで「日本よりも演奏レベルが高い」といった記述をするならば、自らの無知蒙昧を暴露してしまうことになり、中国音楽のそれも一部しかみていない、正にディレタントの言説となってしまう危険性がある。しかし、残念ながらそうした類の情報がネット上を中心に溢れており、しかもそれらが専門家の言説として扱われているのが日本の現実なのである。日本の音楽学領域における中国音楽の研究状況を知らずに、ただ中国語を解し、中国音楽に多少興味がある程度で、中国からの断片的な情報の一面的な把握による単純な思いこみが募るばかりだと、「イベントはすべて大成功」、「中国の音楽界は黄金時代を迎えた」などという無意味な礼賛だけが横行することになる。フランス音楽に興味のあるフランス文学研究者、ドイツ音楽に関心のあるドイツ史研究者をそのままフランス音楽、ドイツ音楽の専門研究者とすることには首肯し難いものがあるはずだが、

それと同じような意味で、世界の諸民族の音楽文化の1つとして中国音楽を捉え、研究する立場からすれば、中国学関連諸分野にそれぞれの専門家として身を置きながら、中国音楽に興味のある程度で（あるいは中国以外の音楽には不案内で）、中国音楽の専門研究者と称するのは実に滑稽かつ無益であるように思われる。

今後の課題としては、日本における中国音楽理解に特有と思える「音楽学の不在」とも形容すべき、斯くの如き中国音楽の情報（源）への認識不足が未だに見られるのは何故なのか、中国音楽へより深く、広くアプローチする視野の形成を阻む究極の要因は何なのか、そうした視点をも加味しつつ、中国音楽の定期刊行物の諸情報を読み解き、中国音楽の最新事情を注視して行きたいと考える。

参考文献

『人民音楽』2007年1月～12月号、中国音楽家協会

《当代音楽》叢書編集部『当代中国音楽』当代中国出版社、1997

増山賢治「中国音楽の情報ソースのベシクからニューメディアまで—21世紀の日中の中国音楽研究に向けての提言—」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要 XIV』（pp.1-12）2002

『中国発行定期刊行物目録 2008年版』東方書店